

～ 日本看護系学会協議会連携事業 ～  
公益社団法人日本看護科学学会 平成26年度 災害看護支援事業

## 事業完了報告書

これから始まる復興と絆、  
コミュニティ再建のための長期支援  
Part2

～はまってけらいん（集まって）  
かだってけらいん（語って）  
を合い言葉に～

所属機関： 日本赤十字北海道看護大学

代表者名： 尾山 とし子

## ■ 事業内容

事業の内容、手法、場所、対象者とその人数などを具体的に記載すること。

### I. 第1回目の活動（平成26年8月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課副主幹、保健師の2名、教員1名
- 2) 陸前高田市小友町財当仮設住宅 談話室：自治会長夫妻2名、教員2名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、救急法・AED講習会実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) がん患者さまのためのタオル地帽子の作成と新生児用の帽子の作成に関してのご相談と、救急法・AEDその他講習会実施に向けての打ち合わせ

#### 3. 活動内容

・市役所を訪問し、健康推進課副主幹と保健師に面会し、仮設住宅集会所で実施する救急法とAED講習会の打ち合わせを行った。今年度は市役所内の人事異動があり、副主幹の保健師さんとは初対面であった。しかし、昨年度実施した仮設住宅で引き続き行いたいという旨と、これまでに実施していない仮設住宅での実施を視野に入れて検討していただくことで合意を得た。

・財当仮設の自治会長さんと連絡をとり、仮設の談話室を訪問し、復興の状況や現在の心境などをお聞きした。また、前年度に依頼していた釧路赤十字病院からの新生児誕生時の低体温を防ぐための帽子の作成については前向きに検討しているというご返事をいただいた。さらに、転倒防止や、健康についての講座などの開催も検討していただけるよう依頼した。

### II. 第2回目の活動（平成27年1月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課長、保健師の2名、教員3名
- 2) 陸前高田市広田水産高校仮設集会所：参加者13名、社会福祉協議会生活支援員2名  
教員3名
- 3) 陸前高田市米崎コミセン：参加者22名、社会福祉協議会生活支援員2名、教員3名  
日赤岩手県支部職員1名
- 4) 陸前高田市長部コミセン：参加者30名、社会福祉協議会生活支援員2名、教員3名  
日赤岩手県支部職員1名
- 5) 陸前高田市小友町財当仮設住宅談話室：自治会長夫妻2名、教員4名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、活動実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) 仮設住宅談話室での救急法とAED講習の実施と「お茶っこ」開催
- 3) がん患者さまのためのタオル地帽子の作成と新生児用の帽子の作成に関してのご相談

#### 3. 活動内容

・8月の訪問時に3月の救急法・AED講習の普及活動に向け、仮設住宅の拡大をお願いしていたところ、1月からの活動が実現した。

今回は、陸前高田市の保健師が社会福祉協議会と交渉し、社協が開催しているサロンのプログラムの一つとして組み入れ、実現したものである。地元の社協では、参加者をバスで送

迎しており、そのことが参加者増加の要因になっている。各実施場所では、週1回のサロンを開催しており、救急法・AED講習は、いつもとは違う内容のサロンとなって参加者の皆様は、高齢にも関わらず熱心に受講されていた。「是非、また来て欲しい。」との要望もあり、大変好評だった。いつも通り、日赤岩手県支部の協力を得て講習に使用する資器材の調達にも問題はなかった。また、この活動を赤十字救急法短期講習として位置づけ参加者には、受講証を交付した。

開催に当たっては、事前に担当保健師とメールでのやりとりを行い、自作の広報用チラシを添付し、社協担当者に渡してもらった。したがって、広報活動がスムーズに行われ、単独での周知よりも効果があったと考えている。地元の社協と繋がりを持てたことは、今後の活動の拡大化や活発化が期待できる。

・財当仮設住宅では、がん患者さまのためのタオル地帽子の作成と新生児用の帽子の作成に関してのご相談に伺った。作成の意欲はあるが仮設から移動する方もあり、なかなか人が集まらない傾向がある。今年の3月で4年目を迎える時期で、住民達それぞれが、行き方を思案し出してきており、流動的になってきているとのご返事であった。無理強いにならないように配慮し、むしろこちらから提供できる救急法・AED講習や健康体操・健康講座などを開催することで、仮設住宅からの移動への不安等を吐露できる場づくりができるのではないかと考える。

### Ⅲ. 第3回目の活動（平成27年3月）

#### 1. 場所・参加者

- 1) 陸前高田市役所 民生部健康推進課：健康推進課長、保健師の2名、教員4名
- 2) 陸前高田市矢作町下矢作假設住宅：参加者8名、社会福祉協議会生活支援員2名  
教員4名
- 3) 陸前高田市高田町柝ヶ沢地区仮設住宅：参加者5名、保健師1名、教員4名
- 4) 陸前高田市高田第一中学校仮設住宅：参加者22名、社会福祉協議会生活支援員2名  
教員4名
- 5) 陸前高田市小友町財当仮設住宅談話室：自治会長夫妻2名、教員5名

#### 2. 活動目的

- 1) 市役所にて、活動実施のための情報収集、打ち合わせ
- 2) 仮設住宅集会所・談話室での救急法・AED講習、家庭でできる応急手当の実施と「お茶っこ」開催

#### 3. 活動内容

・今回の活動では、2箇所（下矢作、第一中学校）が社協のサロン開催、1箇所が単独開催であった。単独開催の仮設は1年前にも訪問した場所であった。開催が3月の年度末の忙しい時期であり、全体的に参加者が少ない傾向ではあったが、社協の生活支援員や保健師の働きかけで開催することができた。また、いつも日赤岩手県支部から資器材だけでなく、指導員が協力に来て頂いていたが、今回は調整がつかなかった。その分、陸前高田市役所民生部長寿社会課の赤十字担当者に予め資器材を送付して頂き、受け取りの際に市の赤十字担当者と新たな繋がりを持つことができ、今後の活動へのステップとなった。

今回も活動を赤十字救急法短期講習として位置づけ、参加者には受講証を交付した。

・財当仮設については、今回は活動を前面に押し出すのではなく、お茶っこを通して仮設住宅の現況についてお話を伺い、情報収集に努めた。

以下に、救急法・AED 講習プログラムを記す。

- 1) 社会福祉協議会生活支援員からご挨拶と私達の紹介
- 2) 挨拶と自己紹介
- 3) オリエンテーション（内容説明）
- 4) 心肺蘇生法（幼児安全法） デモンストレーション 演習（参加者の皆様と共に）
- 5) AED の使い方 デモンストレーション 演習（参加者の皆様と共に）
- 6) 三角巾や買い物袋を使った腕の吊り方など
- 7) 「お茶っこ」  
必要時、血圧測定・健康相談

## ■ 事業成果

できるだけ具体的に記載すること。

### 1. 陸前高田市の社会福祉協議会との繋がりによる活動の発展

活動の度に陸前高田市役所を訪問し、担当保健師とのコミュニケーションを図ることで、活動に必要な情報を得ることができた。特に今回からは、社会福祉協議会との繋がりを持つことができ、活動の場が広がった。どの仮設も毎週 1 回社会福祉協議会が中心となってサロンを開いている。サロンの1つのメニューとして、救急法・AED 講習を組み入れることができ、社会福祉協議会の生活支援員からも高評価を得た。

どの仮設もやはり高齢者が目立つが、取り組みは熱心であり「また、是非来てください」とのお言葉を頂いた。

### 2. 「お茶っこ」開催の意義

毎回、講習の後に「お茶っこ」を開催し、お話を伺う機会としている。震災から 4 年が経過し、仮設宅から個人で自力再建を果たした方や、災害公営住宅に移る方、仮設住宅から別の仮設住宅に移る方など様々であり、被災者の方の格差がますます感じられる。仮設住宅では「移る」と言うことをなかなか普段、口に出せない人間関係や環境だったりする。当事者は、仮設から出てまた別のコミュニティの中に入ることになり、その事に対する不安は否めない。けして周囲から羨望されるような事ばかりではない。

さらに、50 歳代の女性の方から、「最近、自分と同年代の人が自殺している。」というショッキングな話題があり、災害では高齢者や子どもに目が向きがちだが、私達のような働き盛りの人間にも目を向けて欲しいという本音が語られた。

このような状況を外からの支援者である私達に話し、私達も傾聴するという場は重要であると考えている。

また、開催内容の要望を聞く場ともなっており、たとえば、救護に関連して仮設住宅でも計画されている避難訓練などに必要な応急手当などを教えて欲しいという要望が聞かれた。

### 3. 担当保健師を始めとした市職員との人的交流

震災後の 4 年間、年 3 回の活動を通して得られた人脈は大きい。以前にも頂いた「活動を通して被災の方々とつながり、【また、来る。】と約束をしてくれることが、復興への活力につながっているのです。」という言葉や「自分たちの思いは、やはり震災当初を知っている人に話したい。」という率直な声がある。震災当時陸前高田市は、行政機関が壊滅状態にあり、そのような状況下での被災者支援が彼らにとって重圧であった。当時亡くした同僚への弔いもままならず、現在まで走り続けてきた経緯がある。

短時間の市役所での訪問や一緒に活動を見守ってくれる社会福祉協議会の生活支援員との会話には、彼らの「援助者であると同時に被災者でもある。」という思いが垣間見られ、少しずつ心を開いてくれている感覚がある。被災地に毎日いられる訳ではないが、毎年、コンスタントに来てくれている外からの支援者という認識を持っていただき、ある程度の信頼関係が構築されてきたと感じている。この繋がり感を大切に、援助する側のこころのケアとなれるよう努力したい。

### 【今後の課題】

被災地は4年が経ち、復興住宅等の建設が進む一方で、自力再建する方々の転居ストレスや仮設に残された方々のストレス、防災集団移転等によるストレスなど、様々な形でのストレスが継続している。被災者ひとりひとりを大切にしたい復興を考えると、被災者ひとりひとりが抱える問題は、年々異なってきたように思える。4年の歳月で健康状態は身体のみならず、精神にも及び自殺者の存在もある。そして、4年の歳月は復興へのエネルギーにも影響しているように思われる。

復興への支援は長く、どこまで行ったら良いのか境目が見えにくい。自分達が手を出すべきなのかも分からない状況が確かにある。また、実施している支援内容が被災者に必要とされているのかも評価しづらい。しかし、この4年間継続して現地に赴き人々の話を聞くと、「つながり」というキーワードの存在を感じる。つながり方は、様々あっていい、毎日現地で被災者と共に暮らすことだけが「つながる」ことではない。私達のように継続して外から顔を見せる存在、その人が来たらこのことを話してみようと思える存在のつながり方も必要なのではないかと考える。そうすれば、問題解決に直接結びつかないまでも、問題解決のための選択肢が増えることに繋がるのではないかと考える。

以前から言われている被災者の方々のメッセージである「忘れないで欲しいという願いと、この状況を広く世の中に発信していただきたい。」との言葉通り、4年目からも被災者の方々と共にこの混沌とした状況に継続して挑戦していきたい。